



薬物治療を支える 薬のスペシャリスト

薬剤部では、医薬品の適正使用・リスクマネジメントを通じて「安心・安全で効果的な薬物治療」が提供できるように支援している。

調剤に代表される薬を提供する従来業務に加え、ベッドサイドで薬の説明をし、副作用や相互作用がないかをチェックするなど、より患者さんに近いところで仕事をすることが増えている。これは、薬物治療の有効性・安全性の向上と、医療の高度化・複雑化に伴う医療スタッフの業務負担軽減をめざし、チーム医療の担い手として薬剤師の活動範囲が広がっているからである。さまざまな医療職と協働しつつ、薬の専門家である薬剤師の介入により、患者さんのより良い治療効果に結びつくよう日々業務を行っている。

業務内容の特徴と実績

【調剤関連業務】

患者さんへの適正な医薬品の供給を基本に、電子カルテや薬剤オーダーシステムなど、IT技術を活用して業務の正確性・効率性を追求している。外来は院外処方せんの発行が原則になっているが、最近では、院外処方せんの患者さんに対して、内服抗がん剤の説明を薬剤部カウンターで行うなど、適切な薬物療法が実施できるように保険薬局との連携を進めている。また、手術部には薬剤師1名が常駐し、手術用医薬品のセットや麻薬等の管理を行っている。

【病棟業務】

患者さんの持参薬確認、服薬説明・薬歴管理、医師や看護師への医薬品情報提供、病棟配置薬の管理など、医薬品にかかわる業務を各病棟で行っている。2012年10月から全病棟に薬剤師が常駐するようになり、医師との間で事前に作成・合意されたプロトコルに基づき、持参薬の内容確認・仮オーダーと服薬計画の提案、免疫抑制薬・抗菌薬の薬物血中濃度測定オーダーなどを開始。さらに、感染対策チーム、栄養管理チーム、がんサポートチームなどに参画し、薬剤師の職能を生かした活動をしている。

【院内特殊製剤・無菌調製業務】

治療や調剤上必要であるにもかかわらず市販されていない薬剤を製剤室で調製し、患者さん個別の治療に対応している。さらに、高カロリー輸液の無菌調製に加え、薬剤師が入院および外来の注射用抗がん剤の綿密な処方監査と無菌調製を実施。2013年3月に調製監査システムを導入し、より安全な医療の提供に貢献している。

【医薬品情報業務】

医師・看護師・病棟担当薬剤師をはじめ、さまざまな医療職からの医薬品に関する問い合わせに対応し、医薬品の適正使用推進に努めている。院内採用医薬品の定期的見直しや後発医薬品に関する評価を行っている。

【薬物血中濃度モニタリング(TDM)業務】

免疫抑制薬、抗てんかん薬、抗菌薬など40種類の薬物血中濃度を測定。必要時には、個別投与設計、病棟担当薬剤師と連携した薬物動態学的介入などを行っている。

【治験関連業務】

円滑かつ適正な治験実施のために、治験薬の管理、治験事務局業務、治験コーディネーター業務を実施。最近では、医師主導治験、臨床研究にも支援の範囲を拡大している。



高度先進医療等への取り組み

診療各科との共同研究などを展開

①薬物療法の個別化をめざした診療支援

免疫抑制薬や抗がん剤などについて、薬物血中濃度モニタリングに加え、薬物動態関連遺伝子の発現量測定や遺伝子多型解析を行い、患者さん一人ひとりに合わせた最適な投与設計法の考案等を行っている。

②新たな薬物療法開発のための院内製剤

文部科学省橋渡し研究加速ネットワークプログラムにおいてトランス

レーショナル・リサーチをサポートするため、先進医療をはじめとした臨床試験用試験薬を院内で製造している。

③診療各科との共同研究

特定薬剤治療管理料算定対象外であるが臨床上重要な薬物の体内動態解析や、薬物トランスポーターおよび薬物代謝酵素の遺伝子多型解析を行い、新規治療法・個別投与設計法の開発をめざし、診療各科と共同で臨床研究を展開している。